

〔源氏物語二十八〕春のあけぼの、霞のまよりおもしろきかば櫻の、さきみだれたるをみることす。

〔河海抄十野分〕かはさくら○中略

かば櫻とは、花の色うす紅にて、ことさら艶なる花也、和名には朱櫻とかけり、古今にかにはざくらとあるこれなり。

〔古今要覽稿草木〕弘賢曰、カニバザクラのニを省きて、カバザクラといひしなり、倭名鈔櫻桃一名朱櫻ハ、カ、一云ニハザクラと注したれば、カバザクラの證にひきしは誤なり、契沖がいひしは無稽なり、和名鈔に輔仁の本草和名を引たるに、本書にカの字あれば、和名鈔今之本脱字なり、河海抄引用の本にはカの字在しならん、さて本艸和名に櫻桃の一名あまた有てハ、カノミ、カニハザクラノミとよみて、草の部に收たり、然るを倭名鈔には木部にうつして、ノミの二字を省きたり、櫻桃はユスマラムにて、サクラにはあらずとおもはるれども、櫻字をサクラとよみしうへは、カバザクラは花の色赤ければ、朱櫻の字をかり用たるにて、こゝのカバザクラ、かしこの櫻桃なりといふにはあらず、

○按ズルニ、樺及ビ櫻桃ノ事ハ、別ニ其條有リ、宜シク參看スベシ。

〔北邊隨筆〕一、淺黃櫻

長明四季物語といふものに、御社のあたり、みあれ山の櫻は、あさ黃なるもありて云々とあり、今世淺黃櫻といふ物これなるべし、これよりふるきものには、いまだおよばず、されどこの四季物語うけがたきものなれば、かへりて後にや、

〔書言字考節用集六生植〕八隔櫻葉万

〔詞花和歌集一〕一條院の御時、ならの八重櫻を人の奉りけるを、そのおり御前に侍りければ、その